

点が点に対する:初期対位法理論に見る contrapunctus の比喻性

津上 英輔

ラテン語 contrapunctus (対位法) は punctus contra punctum (点が点に対する) という句に由来する。しかし中世同時代の語源説は理論家ごとに異なっており、それを分析することが初期対位法観を解明する手がかりになる。14, 15 世紀の音楽理論書を概観するにあたり、検索にはデータ・ベース Thesaurus Musicarum Latinarum を用い、各理論書の年代については、Lexicon musicum medii aevi の Quellenverzeichnis に従った。

この句は、14 世紀唯一の出現箇所では punctus contra punctum という完全な形で現われるが、15 世紀の 12 箇所では何らかの変化を蒙っている。このことが示すのは、もとの形が伝えていたある意味が 15 世紀で脱落したということである。

Punctus contra punctum の句では、punctus (点) が、contra (に対する) と組になることで、本来の空間性が前面に出ている。なぜなら、明確な位置を持つが大きさを欠く存在としての点は、何かが「対する」先として最もふさわしいからである。この2つの語が合わさって「点が点に対する」を意味する時、それは鮮やかな空間的比喻を成しているのに対し、変形ではその比喻性が消えてしまう。この観察を敷衍すれば、最初期の理論では、対位法は音符対音符として空間的にとらえられていたが、時代が下るとこの感覚が薄まっていった、ということになる。

ところで、初期ネウマ譜が示すとおり、個々の音を点で表わす表象法は西欧固有のものではない。11 世紀にネウマが音高を個別に表示するようになるにあたって、ボエーティウスによって導入されフクバルドやグイードのような中世理論家によって展開されたギリシャ音階論が、大きな役割を果たした。すると、西洋の最も特徴的な音楽様式である対位法は、ギリシャ音楽理論にその成り立ちを負っていることになる。